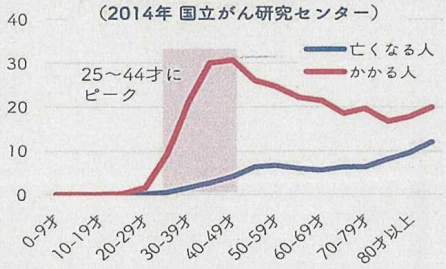
あなたの将来を守るために・・・
大切なワクチンがあります!!

若い女性に子宮頸がんが増えています

*毎年約1万人の女性が子宮頸がんにかかり、
約3000人が命を失っています。

*特に、妊娠・出産を迎え、さらに子育て世代、働き盛りの女性
20～40歳代でかかる人が増えています。

子宮頸がんの10万人あたり人数
（2014年 国立がん研究センター）



子宮頸がんの原因は ヒトパピローマウイルス（HPV）の感染です

性交渉により8割の女性がHPVに感染します。
自然に排除されることも多いのですが、生涯で全女性の約73人に1人が子宮頸がんにかかります。

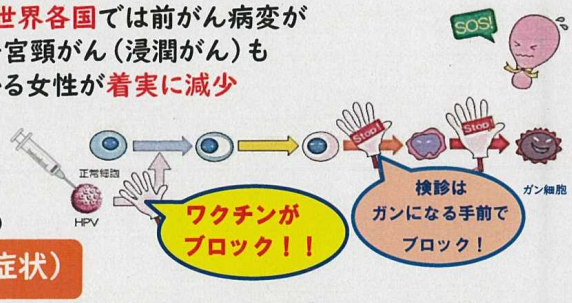
子宮頸がん予防 ＝ **子宮頸がん予防ワクチン HPVワクチン接種** ＋ **子宮頸がん検診**

ワクチンのメリット（子宮頸がんの予防効果）

*HPVワクチンで子宮頸がんの6～7割が予防可能です。

*HPVワクチンを12～13歳で接種している世界各国では前がん病変がすでに劇的に減少し、同時に30歳以下の子宮頸がん（浸潤がん）も激減してきており、今後は子宮頸がんにかかる女性が着実に減少することが推測されます。

*最近日本でも、非接種者より接種者の方が子宮頸がん検診での異常が52～88%減少したと報告されています。（宮城県・秋田県）



ワクチンのデメリット（接種後に起こる症状）

*HPVワクチンの副反応として接種直後のふらつき・注射部位の痛み、腫れ、発熱等がみられることがあります。

*接種からの期間を問わず副反応が否定できない症状（有害事象）のひとつとして、頻度は稀ですが、広範な痛みや様々な身体症状（機能性身体症状）が報告されています。

接種しなくても同様の症状を訴える人が同じくらい存在するとの報告があり、ワクチンとの因果関係は示されていません。

（名古屋スタディ）

ワクチンをよく知って接種しましょう

◎HPVワクチンは、定期予防接種として小6～高1の女性は無料で接種できます。
（各自治体窓口、もしくはお近くの産婦人科・小児科へお問い合わせください）

◎接種の意義については、保護者だけでなくご本人にも理解いただくことが大切です。かかりつけ医とよくご相談の上、接種されることをお勧めします。

◎ワクチン接種後に何らかの困った症状があり、心配される場合は、和歌山県では、厚労省の指定する協力医療機関の窓口を和歌山県立医科大学附属病院と日赤和歌山医療センターが担っていますので、どちらかの病院で相談を受けることができます。

◎HPVワクチンに関する情報は右側のQRコードでもご覧いただけます。

厚生労働省HP　日本産科婦人科学会HP

和歌山県産婦人科医会・和歌山小児科医会・和歌山県医師会

感染を防ぐために、大切なワクチンがあります

令和2年10月27日作成

✿子宮けいがんで苦しまないために、できることが２つあります

✿ＨＰＶワクチン接種

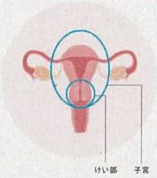
定期接種対象者・・・小学校６年～高校１年相当の女の子※

（※詳細は各自治体窓口、またはお近くの産婦人科・小児科にお問い合わせください。）

✿子宮けいがん検診

20歳以降は、２年に1度子宮けいがん検診を受けましょう

✿子宮けいがんの現状



- 子宮けいがんは、子宮のけい部という子宮の出口に近い部分にできるがんです。
- 子宮けいがんは、若い世代の女性のがんの中で多くを占めています。

- 日本では毎年、約1.1万人の女性がかかる病気で、さらに毎年、2,800人の女性が亡くなっています。
- 患者さんは20歳代から増え始め、30歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう（妊娠できなくなってしまう）人も、数多くいます。
- 子宮けいがんの原因は、ほとんどがHPV（ヒトパピローマウイルス）の感染です。
- HPVは、ありふれたウイルスで、性的接触を介して誰でも感染する可能性がありますが、感染した人の中の一部が、前がん病変を経て、がんへと進みます。

まずはワクチンのことをよく知ってください

✿ＨＰＶワクチンの接種について

＊小学校６年～高校１年相当の女の子は、ワクチン接種が公費で受けられます※。

※公費の補助がない場合の接種費用は、３回接種で約４～５万円です。

＊今、日本で使われているワクチンは２種類（サーバリックス®、ガーダシル®）あります。病院や診療所で相談し、どちらか一方を接種します。

＊ワクチンの種類によって接種の間隔が少し異なりますが、どちらも半年の間に３回接種を受けます。

和歌山県健康推進課

すべてのワクチンには効果とリスクがあります

✿HPVワクチンの効果

＊ＨＰＶワクチンは、子宮けいがんをおこしやすいタイプであるHPV16型と18型の感染を防ぐことができます。そのことにより子宮けいがんの原因の50～70%を防ぎます。

＊ワクチン接種により国内外において、子宮けいがんの前がん病変の劇的な減少が証明され、30歳以下の子宮けいがんの著明な減少も示されています。

✿HPVワクチンのリスク

＊ＨＰＶワクチン接種後には、多くの方に、接種部位の痛みや腫れ、赤みなどが起こることがありますが1～2週間程度で消失します。
まれですが、重い症状（重いアレルギー症状、神経系の症状）が起こることがあります。

＊接種直後は、まれに不安などから、立ちくらみや意識がもうろうとすることがありますので、接種後は30分程度安静にしましょう。

発生頻度	ワクチン：サーバリックス®	ワクチン：ガーダシル®
50%以上	疼痛・発赤・腫脹、疲労感	疼痛
10～50%未満	掻痒、腹痛、筋痛・関節痛、頭痛など	腫脹、紅斑
1～10%未満	じんましん、めまい、発熱など	掻痒・出血・不快感、頭痛、発熱
1%未満	注射部位の知覚異常、感覚鈍麻、全身の脱力	硬結、四肢痛、筋骨格硬直、腹痛・下痢
頻度不明	四肢痛、失神、リンパ節症など	疲労・倦怠感、失神、筋痛・関節痛、嘔吐など

＊ＨＰＶワクチン接種後に生じた症状として報告があったのは、接種１万人あたり、約９人※です。
※企業からの報告では販売開始から、医療機関からの報告では平成22年11月26日から令和元年8月末時点までの報告の合計出荷数量より推計した接種者数343万人を分母として1万人あたりの頻度を算出した数

＊接種後（1か月以上経過してから）、痛みが長く続いたり、体が動かしにくいなどの症状が報告されましたが、厚生労働省の専門部会ではこれらの多くは機能性身体症状※であるとの見解を示しており、ワクチン接種との因果関係は証明されていません。
※何らかの身体症状はあるものの、画像検査や血液検査を受けた結果、その身体症状に合致する異常所見が見つからない状態

＊ワクチン接種後に何らかの困った症状があり、心配される場合、和歌山県立医科大学附属病院と日本赤十字社和歌山医療センターで相談を受けることができます。

＊ＨＰＶワクチンに関する情報は右側のＱＲコード（厚生労働省ホームページ）でご覧いただけます。

このご案内は、小学校6年～高校1年相当の女の子やその保護者の方に、
子宮けいがんやHPVワクチンについてよく知っていただくためのものです。
ＨＰＶワクチンの接種を希望する方が受けられるよう、みなさまに情報をお届けしています。

✿このチラシに関するお問い合わせ先✿
和歌山県健康推進課　☎073-441-2643

和歌山県健康推進課